

作文コンクール 優秀賞作品「私の中に見つけた信念」

大阪府立夕陽丘高等学校 2年 白岩瞳さん

「人である前に教師であれ。」これは、この間までの私が漠然と思っていたことだ。私は、つい最近まで、教育者とは、自分の思想や感情を押しつけることなく、万事を教育者の目で見られる人だと考えていた。しかし、二つのきっかけを経て、今の私は少し違う理想像を持っている。

一つ目のきっかけは、大阪教育大学の教師をめざす高校生育成プログラム、「教師にまっすぐ」に参加して、たくさんの教師の卵に出会えたことだ。初めて会った他校生が夢を語ってくれた。一緒に申し込んだ同級生が、見たこともない生き生きとした表情をしていた。一緒に申し込んだ同級生が、見たこともない生き生きとした表情をしていた。キューピッドの学生達が、嬉しそうに、でも真剣に高校生の言葉を聞いていた。私はとても感動した。周りのみんなが輝いて見えた。しかしそれと同時に、劣等感も覚えた。私は、教師になりたいという熱い気持ちが無かった。でもこの劣等感は、自分と向き合うために必要なもので、むしろ前向きな劣等感だった。

二つ目のきっかけは、これまた大教大でのことで、そこの先生が仰った言葉だった。

「生徒が一番教師に近いところにいる。今のうちに先生をよく見ておいてごらん。」細かいところは忘れたが、確かこんな内容だった。この言葉を聞いて以来、私はたまに、教師の立場から物事を考えるようにしてみた。そうすると、なるほど面白い。私たちが何の気なしに受けている授業が、実は丁寧に作り込まれたもので、どの先生も授業に趣向を凝らしていて、言葉遣いや生徒への接し方も考えられている。教師側の垣間見える努力に驚愕した。それだけでなく、ワクワクしている自分もいた。私ならこんな授業をしたい、何を一番教えてあげよう。湧き上がる教えたいという欲求、この気持ちこそ、私が教師をめざす理由なのだと気づいた。

二つのきっかけを通して、私が嫌っていたあの先生も、中学生の時担任だったあの先生も、小学校の時の音楽の先生も、みんな教師の卵だったのだとハッとした。努力を重ねて夢を叶えた輝いている人達なのだと気づいた。もちろん、そうでない人もいた。仕方なく教師になったと、そう仰った先生もいた。しかし、向上心のない先生など、努力していなかった先生などいただろうか？否、いない。案外私は先生に恵まれているのかもしれない。

今の私が思う理想の教師像は、人として尊敬される教師だ。そうなれるよう、私が教師になれるまで、いやなことから、何事にも全力でいよう。

「継続は力なり。」「人の人生を預かるのが学校や。」「目線を変えたら分かることがある。」

「教師として帰ってきてください。」今まで出会った先生方が私に贈ってくださった言葉が、今の私を励ましてくれている。「人として教師であれ。」私自身の信念を胸に、日々、前進。